

Title	「価値論の諸問題」第二編 (社会政策学会誌一八三ノ二) : ミーゼス及びシュピートホフ編纂
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.11 (1933. 11) ,p.1757(151)- 1765(159)
JaLC DOI	10.14991/001.19331101-0151
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19331101-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「價值論の諸問題」第二編

(社會政策學會誌一八三ノ二)

——ミーゼス及びシュビートホフ編纂——

氣 賀 健 三

本書は本年七月の本誌に紹介せる「價值論の諸問題」第一編の續編を爲すものである。第一編は既述の通り其後に開かるべき同學會委員會に於て價值論上の諸種の問題を論議する爲の準備として編纂されたもので、ミーゼス及びシュビートホフ兩教授の名を通じて集められた所の各理論家の價值論に關する所説を纏めた成果である。

茲に紹介する第二編は、斯る準備を経て昨年九月三十日にドレスデンに於て開催せられたる價值論討議の委員會の記録である。同討議に参加して議論を交へた人は可成り多く、次の十九人に達して居る。即ち維納よりミーゼスを初として Dr. E. Schams, Priv. Doz. Dr. Haberler 同く O. Morgenstern 及び Dr. Hans Neisl の五人、柏林より Prof. Dr. E. Lederer, Dr. E. Herzfelder 倫敦より Prof. Dr. F. A. Hayek, Prov. Doz. Dr. Rosenstein-Rodan 其他ブライツより Prof. Dr. L. von Engländer 及び Prof. Dr. F. x Weiss ヴランツより Prof. Dr. A. Amann ンルより Priv. Doz. Dr. Mackenroth, ホントより Prof. Dr. A. Spiethoff ケーニヒスベルグより Prof. Dr. W. Vleugels, キーンより Prof. Dr. G. Colm. ニイプチャヨより Priv. Doz. Dr. E. Egner フランクフルト・アン・マイ

ンより Prof. Dr. Schmidt、ニールンベルグより Prof. Dr. Sven Helander が討論會參加者である。

此等の顔觸れに依つて容易に窺はれる様に討論の主題とされた價值理論は限界效用説である。維納から來會した五人の教授並に私講師はメンガー、ベーム・バヴェルク及びウァーザーのなき跡を引受けて煥太利學派の本城を守る人達であり、プラーグのワイス、ケーニイスベルグのフロイゲルス、倫敦のハイエク、ベルンのアモン等は多數の效用説擁護者の中に在つて何れも諍々たる理論家である。

之に對し效用説反對論者として今日名ある人々は、例へばオッペンハイマー、シュパン、又はカッセル等何れも姿を見せて居らぬのであつて、之は確に該討論の價值を一段と低めた感がないでもない。併し會議は頗る熱心に行はれたらしく司會者たるエミール・レーデラーは一人の辯論の時間を僅に二十分に制限することを各人に懇願する必要に迫られた程である。

さて、效用説の如何なる方面が論ぜられたかといふに、それは大體二つの方面に分けられる。一つは方法論上の問題として效用説の論理的假定の是非が論ぜられ、他は價值理論上の問題として客觀的價值論に對する關係が論ぜられた。其中後者に關しては、客觀的價值論の立場に立つて效用説を論難するものがなく、唯、僅にオットー・エングレンダーが主觀的理論の不備を説いて主觀的客觀的兩要素を俟つて初て價格の説明が可能となることを説いた丈けであつた爲め、此方面に於ては期待した程の論戰が交へられなかつた。前者の問題に於ては、マッケンロートが數多の效用論者の演説の後を受けて獨り敢然と立つて效用説の心理學的基礎に關する缺點を指摘したことから俄然論争が激しくなり、立場こそ違へ、コルムやツァイスルが、同様に、效用説の過度に抽象的なる點、現實の生活より離反して居る點を指摘して社會學的基礎付けの必要を説き、之に對して、モルゲンシュテルン、ローゼンシュタイン・

ローダン・エグナー、及びミーゼス、アモン等が效用説の立場から猛烈な駁撃を加へ、該會議の後半の時間は此論争に殆ど全く占められた觀がある。而して問題は、效用説の心理學的基礎の適否如何から其基礎としての社會學的觀察の必要如何に迄及んだのであつて價值理論討論會の目的より見れば些か脱線の觀がないでもない。が併し吾人は此論争に於て、限界效用説の方法論的基礎に關しミーゼス、アモン、ワイス等の明確なる返答に接するを得る。例へば純粹經濟學理論——價值論は之に屬す——は經濟の背後に存する社會學的研究を考慮する任務を負擔するものでないこと、理論は純粹にして抽象的であることが必要であること、效用説が心理學から援助を受けるといふことは決して非難せらるゝ理由にならぬことなどが、マッケンロート、ツァイスル、コルム等に對して上記の理論家達に依つて答へられる。

尙ほ矢張り方法論上の問題としてミーゼスとレーデラーの間に取交はされた所の、興味ある論争が行はれた。之は效用説其自體に關係するものでなく、理論其物の絶對性に關する議論で議論はミーゼスがマルクス流の理論の解釋を本討論會に採用すべきでないといふ主張を會の冒頭に述べることから起る。

ミーゼスは先づ人間の思惟の論理的構成があらゆる時と所とを通じて絶對不變であることを主張する。之はいふまでもなく、最近一部のマルクス・レーニン主義者が理論の黨派性を主張し、思惟が存在に結びつけられることを説き、或はブルジョワ的論理、プロレタリア的論理が存在するかの如き言説に對して反對の態度を表明するもの外ならぬ。彼は如何なる民族、如何なる階級にも拘束せらざる純理論的認識の存在することを主張し、若し人間の思惟がマルクスの主張する様に存在に結び付けられ、ブルジョワ的論理とプロレタリア的論理とが別々に相並んで存在するならば、此等二つの階級に屬する者同志が論争を交へることは絶對に不可能とならざるを得ぬと説いて

居る。兩者の思惟の方法が全く相對立し、此間を結合する共通なる、論理が在り得ないとすれば——共通なる論理が存在するといふことは、相對立すれ何れの存在にも拘束せられざる思惟の形式が成立することに爲るから、——確にブルジョワ理論家とプロレタリア理論家とは議論を闘す手段がない譯である。結局互に相手の理論をば或種の信仰に基礎を置くものとして見るより外に了解の致し方がないであらう。

ミーゼスは當社會政策學會に於ける討論に於ては斯かるマルクス流の考へ方を排斥すべきであると言ひ、又マルクシストはブルジョワ學者を辯駁せんとするものでなく、物理的に又道徳的に否定しやうとして居るのだと斷定を下す。之に對してレーデラーの答ふる所に據れば、マルクシズムを以て「あらゆる思惟は或利害の觀念的代表の意味に於けるイデオロギー」であると主張するものと解釋することは誤謬なのである。何人と雖も、數學の如き或は純理經濟學の如き、社會學的構造から離れ、時と所とより獨立せる純粹論理の存在することを否定するものではない。レーデラーに據れば、精確又は純粹理論から離れて具體的なる歴史的經濟發展過程を觀察するならば、吾人の想定する概念は一定の社會組織に關聯せしめなくては到底考へられぬ。吾人の研究せんとするのは實に此動態的經濟の諸現象であるのである。

レーデラーの斯様な答は些か見當はずれの觀がある、ミーゼスが問題とする所は人間の思惟其物の本質に關するものであるのに對し、レーデラーは一定の思惟方法の下に或特定對象に就て形成される概念を問題にして居るのである。換言すればレーデラーは、理論の絶對性が問題となつて居るのに、それに就ては其絶對性を一應承認して置きながら、之に反する場合として、其論理の支配の下に特定對象に關して作上げられる概念の相對性を以て答へて居るのである、さればこそミーゼスはレーデラーに逆襲して、抑、經濟として、動態でない所の靜態的經濟なるものが

存在するかを疑ひ、又研究方法としての靜態學的方法が經濟の靜態的狀態の説明のみに適し、動態的なる經濟には當嵌らぬといふことの全く誤りであると論じて居る。

此等の方法論上の問題は別として、價值論として最も筆者の注意を惹いたのは、エングレンダーの所説である。之に關する説明を以て本雜誌の紹介に代へることとする。

エングレンダーの議論は客觀的價值説と主觀的價值説との折衷を企てるものゝ如くである。彼は客觀的價值説の代表的なるものとしてリカードを採る。が、それが完全なものでなく諸種の欠點を備へて居ることを承認する。

例へば、リカードの價值説は靜的價格を説明するが、唯、そのみであつて、該價格の上下に動搖する市場價格の説明は出來ぬ。又靜的價格の説明に際して採用する所の假定たるや現實に一致せざるものがある、勞働の單一性の假定や、あらゆる方面に於ける收益遞減の法則の假定の如きはそれである、といふ様なことを指摘する。

奧太利學派は客觀的價值學説の斯様な欠點を自覺して、之と全く反對の方面から價值學説を打建てたものであるが、之に依つて價格形成の説明が成功したとは承諾し難いといふのがエングレンダーの意見である。

即ち奧太利學派は、古典學派の費用學説が一つの循環論理に落入ると言つて非難するが、此非難はエングレンダーに依れば不當である。若し古典學派の費用法則が、一財の價格をば當該財の費用價值から説明するならば確にそれは循環論理に陥入るに相違ないが費用法則の意味は別に解釋せられねばならぬ。即ち當該財の生産に要する生産手段の數量が各財の價值を決定するといふ解釋が正しいのであると。

それから又奧太利學派は費用學説が價值と價格との二律背反を説明し得ぬが、自説に於ては所謂の限界效用の觀念の利用に依つて之を適切に説明すると説くが、エングレンダーは之も亦決して正しくない、と主張する。即ち一

定財貨の限界効用が其數量の増加と共に遞減するといふことは正しいが、此定理からして、數量多き財貨の限界効用は數量乏しき他の財貨の限界効用よりも低位にあるといふ推論は不可能であるといふ。エングレンダーの言は確に正しい。斯る推論は恰度棒の目方は其長さと共に増加するといふ定理からして、或木製の棒の目方は、之より短い鉛の棒より目方が重いといふ推論を行ふのに等しい。斯る推論が愚かしいものである以上限界効用の觀念から價值と價格の二律背反を説明することを斷念せねばならぬ。

エングレンダーは更に奧太利學派の積極的主張の方面に攻撃の鋒先を轉じ、同學派が價格と主觀的價值と、それから此二つのもの、間に在る所の「Preiswillingkeit」(希望價格)即ち「買手が主觀的價值に基いて一定財貨の爲に提供することを漸く承諾する最大限度の價格」との三者の間に明瞭な區別を設けて居らぬと説く。數量的に把握し得ぬ主觀的價值から數量的表現を備へたる價格へ移るには、是非とも其中間に「Preiswillingkeit」の觀念を容れて説明しなければ、理論上頗る困難であるとエングレンダーは考へるのである。

更に又エングレンダーは市場に於けるあらゆる財貨が價格形成上相關を係に在ることを指摘する。若し奧太利學派が、一財貨の價格形成を説明する爲に限界効用又はエングレンダーの所謂 Preiswillingkeit を利用するならばそれは涯しなき循環に陥るといふのである蓋し一財貨に對する「Preiswillingkeit」は、他の財貨の價格が總て定まつた上でなければ一定せぬ。他の財貨の價格をば一定せるものと假定する必要があるといふことは、結局「Preiswillingkeit」の上に立つては全體としての價格形成を説明することが出来ぬといふことを意味する。其處でエングレンダーは結論を下して曰く「斯くの如く價格の説明は奧太利學派に依つては成功して居らぬ。それは麵麩の絶對的價格をも將た又ダイヤモンドの絶對的價格をも説明せぬ。更に又何故に麵麩の價格がダイヤモンドの價格より安

いかといふことをも説明せぬ。既に奧太利學派は其説明の主要目的とせる所の享樂財の價格をさへ説明せぬのであるから該學派は生産手段の價格形成も亦同様に之を説明して居らぬ。と

斯様な斷案を下したエングレンダーは固より奧太利學派を以て全く無用なものと考へて居るものではない。其方法論に於て、其主觀的價值の觀念の強調に於て、限界効用の觀念の輸入に於て、該學派が價格形成の説明上必要欠く可からざる基礎を與へた其效績を承認するのにエングレンダーは決して吝でない。

而してエングレンダーが最後に得た結論は結局かうである。限界効用説は、消極的に「財貨の數量は其主觀的價值に従つて平均せられる」といふことを明にする。換言すれば「或人が或財貨の限界的の一片に對して支拂ふ價格は當該財貨より優れたる他の財貨の一片に支拂ふ價格以上ではあり得ない」といふ消極的限界を表示するに過ぎぬのである。之よりして更に次のことが推論される「或る財貨の價格は、既に存在せぬ所の優越せる他の財貨の方が當該財貨の最後の一片よりも望ましいと思はせる程高くなり、他方に於て、未だ猶ほ提供せらるゝ他種財貨の限界的の一片よりも、既に無くなつた當該財の方が望ましいと考へさせる程低くもない」所に定まると。限界効用説に依つては吾人は價格關係の決定に此以上に接近することが出来ぬ。上下の限界の間に挾まる間隔を狭める爲には他の要素を前提として知ることが必要である。

エングレンダーが他の要素として擧げるものは先づ社會各員の所得の階層(一種の社會的なる限界的均等化)次に價格形成の客觀的技術的決定條件として生産手段の數量と技術上の限界的均等化即ち限界生産力の觀念である。斯くの如くして價格關係の主觀的社會的並に客觀的技術的限界が與へられる。エングレンダーは此限界以上に更に價格決定の餘地を狭くすることは今後の研究に屬する問題であるといふ。

以上がエンゲルンダーの所論の概要である。

彼の説は確に正しい。それは、彼に答へたワイスも亦承認する所である。問題は奥太利學派の所説が今日果してエンゲルンダーの考へて居るが如き内容を持つて居るか何うかである。若し持つて居るならば彼に依つて浴せられた非難を甘んじて受けねばならぬ。

ワイスが該學派の爲に答へる所に據れば、其非難は總て適切といふ譯には受取れぬといふ、即ち先づ Preiswilligkeit の問題に就ていふならば、ベーム・バヴェルクが既に、同じ名辭こそ利用しないが主觀的價値の絶對的大さを現すものとして Preiswilligkeit を認めて居る次第を指摘する。又各種財貨の交換關係の相互依存の關係に就ていふならば、それは正にエンゲルンダーの説く如く奥太利學派に依つて等閑視せられて居るが之は決して該學派の所説と相矛盾するものでなく、奥太利學派と兄弟の關係に在るワルラスの理論に於ては相互依存の關係は美事に説かれてある。それから又限界效用の均等といふことに就ても、エンゲルンダーの考へ方が全然考慮されて居らぬ様なことは無く、ウィトザー自身も、或財貨の限界效用は、均等に爲ると積極的に主張せられる譯でなく、唯、別の用途に利用せられた場合に生ずる如何なる效用よりも低くない限りに於て最低であるといふ消極的意味に於て其均等が主張せられるのだといふ説明を行つて居るのである。最後に費用概念に對する奥太利學派の態度を述ぶるならば、それは正にエンゲルンダーの所見と全く同一であるといふより外はない。

要するに主觀的價值學説は、客觀的價值學説に依つて之まで閑却され來つた所の價値の主觀的要素——消費者の評價と其購買力——を強調詳述し、客觀的要素と同列に之を置くことに努めたものであつて、此意味に於て該學説はエンゲルンダーの所論と根本的に相異なる所は少しも無いといふのがワイスの演説の結論である。

ワイスの應答に對し、エンゲルンダーは再び立つて、自己の學説と奥太利學派の理論とがワイス氏の言ふ如く根本的差違のないものではなく、反對に全然相反するものであると述べるが、唯、そう宣言する丈けであつて、吾々に取つて不幸なることにはより以上詳細な議論が交はされて居らぬのである。併し吾人は此論争に依つて效用に關して從來曖昧に解されて居つた多くの點が明瞭に表現さるゝに至つたことを感謝せねばならぬ。